

7/16
早良 福助

憲法学者は

批判と不満

安保法案可決

安全保障関連法案をめぐっては、憲法学者も国会内外で主張を展開してきた。衆院憲法審査会で違憲との立場を示した長谷部恭男、早稲田大教授は十五日の採決に「極めて問題」と批判、小林節慶応大名誉教授は「歴史的には憲法が激しく否定された日と評価されるだろう」と述べた。採決を支持する百地章日大教授も「政府の説明は不十分だ」と不満の声を上げた。

長谷部、小林両氏は六月の衆院憲法審査会に参考人として出席、法案は違憲とした。自民党から推薦されていた長谷部氏は「問題のある法案だ」という意味で国

民の理解が進んでいる。今国会での成立は必要ないという意見も多い。そんな中での強行採決は問題だ」と語気を強めた。

小林氏も「憲法は主権者である国民と権力者との間での、最低限で最高位の約束なのになぜ安倍政権はそれを無視した。最悪だ」と手厳しい。

審議には百時間超が費やされたが「政権には何を言っても通じず、議論がかみ合っていないかった。強行採決は予想された」と話した。

一方、菅義偉官房長官から、集団的自衛権の行使容認を合憲とする学者として名前を挙げられた百地氏は「戦争法案だと決めつけ、国民の不安をあおる野党が絶対反対との姿勢を崩さない以上、採決はやむを得ない」と強調する。